

# 教養としての民主主義

政治経済学部政治学科3年 濱英剛

# 本日のテーマ

民主主義の理論と歴史を軸に、自由・平等・戦争・憲法・権力・宗教・脳科学などのキーワードを織り交ぜながら、社会科学における「思考のフレーム」を提供する。



# 今回の勉強会の狙い

現実の社会問題を洞察する「視点」を  
より多様化・深化させること



# ～目次～

1. 民主主義の理論と歴史
2. 民主主義における論点
3. 現代の民主主義の課題と展望



# 民主主義は良い思想か？

“Democracy is the worst form of government, except for all those other forms that have been tried from time to time.”

—Winston Churchill



# 1. 民主主義の理論と歴史



# 歴史を通じてのポイント

- ・民主主義はつい最近まで「危険な思想」だった？
- ・民主主義は議会や憲法と歴史的に関係がない？
- ・民主主義が自由を抑圧する？



# 古代ギリシア

- ・民主主義の発祥はギリシアにおける**ポリス(都市国家)**
- ・行政や司法も自由民からの**抽選**  
アリストテレス「抽選こそは民主政体の特徴である」…**選挙は貴族的**
- ※自由民は限られた地位の人間のみ(**アリストテレスは奴隷制を肯定**)
- ・民主政的なアテネは貴族政的なスパルタに敗れ、その渦中でソクラテスは「民主的な」裁判により死刑
- プラトンは民主政を激しく批判**



# 中世ヨーロッパ

慣習法

王

貴族

マックス・ウェーバー「永遠の昨日」

…伝統主義的性格が非常に強い

・王権が非常に弱い(「同輩中の首席」)

・「国境」「国土」「国民」の観念が非常に薄い



# 議会と憲法の起源

**議会**…イギリス議会(1265年)

**憲法**…イギリスにおけるマグナ・カルタ(1215年)

→いずれも王・貴族・聖職者などが各々の既得  
権益を守るために作られたものであり、決して  
「民主的」なシステムではなかった

→これが近代以降民主的機構に吸収され、現代  
の民主主義に必須の要素となっていく



# 中世ヨーロッパ社会の崩壊

- ペスト(黒死病)の大流行により、農奴の約4分の1～3分の1が死亡

- 封建領主(貴族)の収入が激減

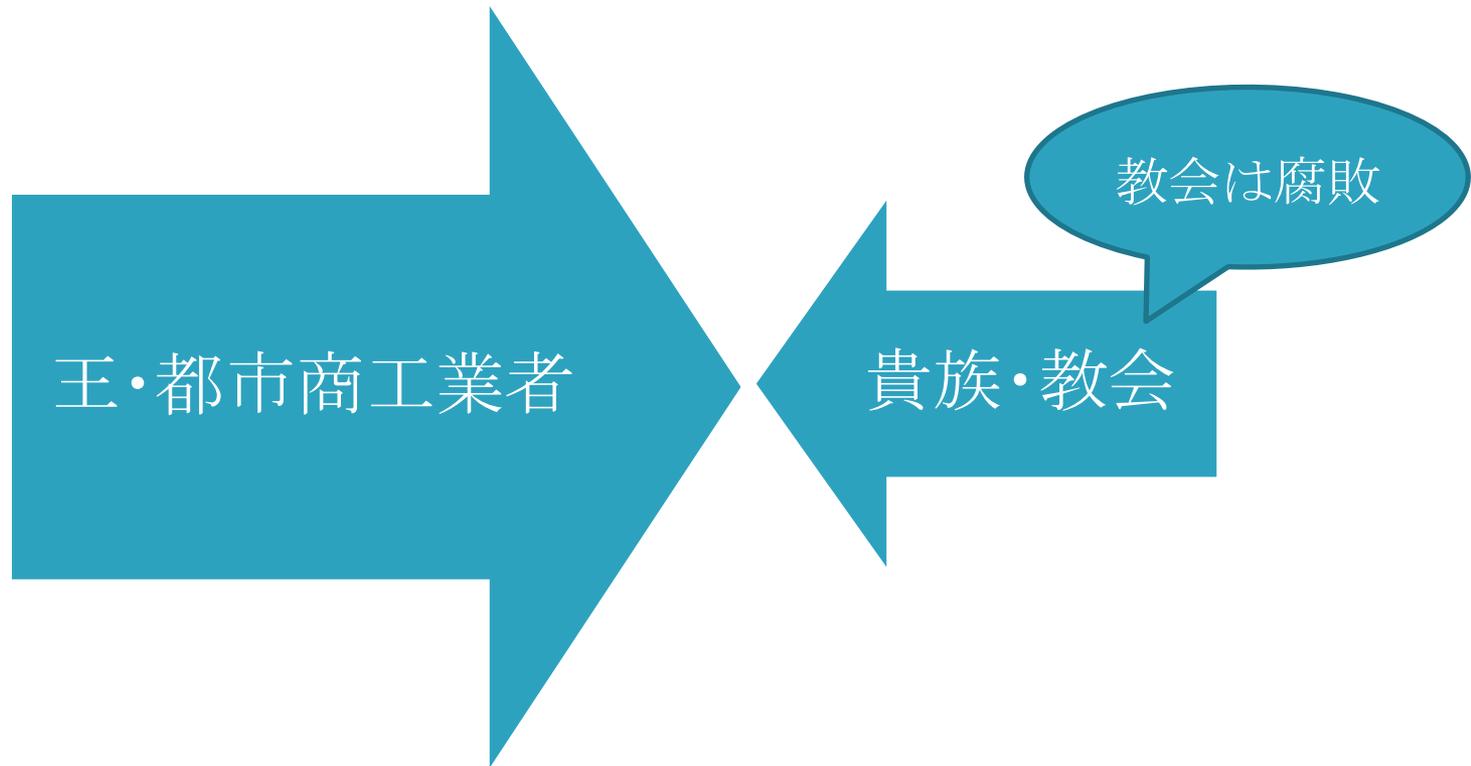
- 貨幣経済の発達

- 農奴が豊かになり、自由農民となって逃げ出す

**⇒ 封建領主が没落**



# 絶対王政への道



王は商工業者からの投資により**常備軍**を創設し、絶対王政へと突き進んでいく



# 絶対王政

• 権力が王に一極化したため、議会は停止  
(フランスにおけるルイ13世の時代)

• ボダンによって「主権」の概念が現れる  
主権…国家の絶対にして永続的な権力

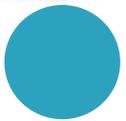
① 立法権

② 課税権

③ 徴兵権



リヴァイアサン  
の誕生



# 宗教改革

- ・長年におたる教会の腐敗→マルティン・ルターから始まる宗教改革  
→「プロテスタント」が生まれる
- ・ルターの思想を受け継いだジャン・カルヴァンが登場  
→「予定説」や「天職」などの概念を導入し、後のピューリタン革命や資本主義の誕生をもたらすこととなる

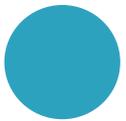


# プロテスタントの思想

⇒人間は等しく墮落した存在であり、救済されるかどうかは人間の能力や意志に関係なく神の御心次第である。であるからして、常に清貧に暮らし働き、敬虔なキリスト教信者でなければならない

→こうした強烈な「神の下の平等」が「法の下での平等」へと世俗化し、革命思想の培養基となる

→後に目的合理性の思想へ変化し、ロックの思想と合わさり資本主義が誕生することとなる  
(マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」)



# ピューリタン革命（イギリス）

クロムウェルがチャールズ1世を処刑し、共和制とする

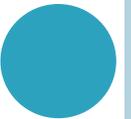
→普通選挙権や思想・良心の自由を主張した水平派を弾圧

→クロムウェルの死後、王政に戻ってしまう

⇒ ジョン・ロックの登場



# ジョン・ロック



# ロックの思想

## ①社会契約説

国家は人民が必要性を認識して相互に契約を結んだ結果できたものであって、本来国家は人民の諸権利を守るために生まれたものである  
→それにも関わらず国王が暴政を行えば、人民は抵抗する権利がある

## ②私有財産の権利

私有財産は個人が労働を通じて正当に得た対価なのだから、これを正当な理由なく侵害することはあってはならない

⇒リベラリズムの祖



# 「リベラリズム」とは何か？

リベラリズムの意味は非常に多義的であり、定義することは不可能

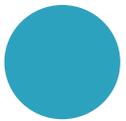
→ただし広く共通する特徴として、「**個人の自由**あるいは**自立性を尊重する個人主義の理念**に基づいて、**絶対的権威や権力を拒絶する思想**」であるということが言える

→時代の情勢によって大きく変容する思想である



# リベラリズムにおける大きな対立

- **自由放任的リベラリズム**…権力を嫌悪・性悪説・小さな政府(権力からの自由)
  - 権力の介入を拒否することで自由を保障
  - ニュー・リベラリズムからの批判
- **福祉国家的リベラリズム**…権力を利用・性善説・大きな政府(権力への自由)
  - 権力の介入によって自由を保障していく
  - ハイエク等からの批判(「隷属への道」)



# リベラル・デモクラシーの構想

デモクラシーにおける「**多数者の専制**」(トクヴィル)が、リベラリズムにおける**個人の自由**を侵害する虞があった

→**意見表明の多元性**を制度的に確保することができればこの2つの概念は両立するのではないかと考えた

⇔共産主義的民主主義(例:水平派、ロベスピエール、マルクス)



# フランス革命・アメリカ独立革命

- ・フランス革命は民主的な発展に成功しなかったが、旧体制を徹底的に破壊したため共産主義思想へと繋がっていった
  - ・アメリカ独立革命により、私的な利害を集積し、政治に反映させるシステムが完成した
- ⇔ 共和主義的民主主義

※この2つの革命によって、中世からの遺産である**立憲主義**が転回をおこした



# 立憲主義とは何か？

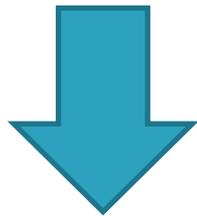
「法の支配」に類似した意味を持ち、およそ権力保持者の恣意によってではなく、**法に従って権力が行使されるべき**であるという政治原則をいう。—ブリタニカ国際大百科辞典より

→リヴァイアサンたる国家を法で縛ることに  
よって、**国民の諸権利を確保し自由を保障  
する為の制度である**

→**憲法は国民による国家への命令である**

# 民主化の圧力

産業革命などにより選挙権が拡大していく中で  
ある大事件が更にその流れを加速させ、大衆デ  
モクラシーへと直進することとなる



その事件とは…？

第一次  
世界大戦



# 世界大戦、そしてヒトラー

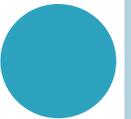
- 一次大戦は総力戦となり、その反動として**参政権の要求が高まった**
- この大戦を機に「**民主主義は良い思想である**」という価値観が一般に定着するようになる
- 戦後は英・仏とも宥和政策を推進したため、ナチスの躍進を招いた
- ナチスは「最も民主主義的」と言われたワイマール憲法を「**民衆の熱狂的な支持によって**」機能不全にし、全権を掌握した  
(例:カエサル、ナポレオン)



# アドルフ・ヒトラー



「大衆は自然の一部である。彼らが欲しているのは、強者の勝利と弱者の絶滅、全面的な屈服である」



# ファシズムの教訓

丸山眞男『生活の窮迫や不安は必ずしも「自生的に」大衆の左翼化をもたらさぬこと、むしろ不安や挫折から生まれる行動様式は自主的、合理的な組織化の方向ではなくて、しばしば逆に**自我の放棄による権威への盲目的な帰依**としてあらわれること—これがファシズムの勝利の教えた貴重な教訓であった』

またフロムは、社会的な紐帯から解放されたことによる不安や孤独、無力感にさいなまれた個人が、それを克服すべく自ら**新しい権威に服従しようとした結果**ファシズムが成立したと分析している(「自由からの逃走」より)



# 冷戦という「民主主義の」対立

- 一次大戦と違い、二次大戦は直後から冷戦が始まるという幻滅からのスタートであった
- 自由民主主義と共産主義的民主主義の対立  
→「平等」をどこまで進めていくのか  
←「機会の平等」と「結果の平等」
- 対外的脅威に対する権力の集約化とそれに付随する問題について



## 2. 民主主義における論点



# 「多数決」は民主的か？

多数決はあくまでも「多数を全体の総意と見做す」擬制（フィクション）であって、民主主義的手続きとは言えず、むしろ合理主義的・排他的な手続きと言える

→少数意見をどれだけ政治の中に組み入れるかという問題がある  
(例: 比例代表制)



# 「代理」と「代表」の対立

**代理**…選挙区における私的な利害を国政へと持ち上げていく

→候補者自身の裁量は狭い

→民主的であるかもしれないが、モラリズムの政治が行われやすい

**代表**…国民全体から選ばれたとして、国という視点で政策判断をする

→候補者自身の裁量は広い

→リアリズムの政治が行われやすいが、民主的とはいえない

⇒この2つの要素をどれだけ配合するべきかという問題

これらの論点はしばしば**選挙制度**と結びつけて考えられる。選挙制度というものも**一種の擬制**であり、「きちんと民意を汲み取ることができているのか」「政策実行力を備えた権力を作り出すことができるか」という**対立**を**不断に克服しよう**と**努力し続けなければならぬ**。



# 3. 現代の民主主義の 課題と展望



# 大衆デモクラシーの難題

①大衆の政治的無関心

②大衆の非合理性



# 大衆の政治的無関心

近代以前の社会…政治的関心を持たないのが通常であり、黙従と従順が唯一の政治的行動様式(「帝力我に於いて何か有らんや」)であった

→現代の民主化の波により、世界的に一時的な関心は高まったものの(安保闘争など)、それ以後無関心へ陥る事態になった



# 無関心の原因

- ① 選挙権の拡大に伴う1票の価値の低下
- ② 政治機構の複雑化と政治範囲の国際的拡大
- ③ 現代社会の官僚化・合理化の傾向(マックス・ウェーバー)
- ④ マスコミの発達による政治の娯楽化



# 無関心がもたらす悪影響

- ・丸山眞男「(政治的無関心は)その国の政治にとって巨大な影響を及ぼしてくる。つまり、**専制政治を容易にする**」

- ・大衆が政治に受動的になる→現状を改善しようとする力が育ちにくくなり、**腐敗の傾向を生む**

- ※アクトン卿「あらゆる権力は腐敗の傾向を持つ。絶対的権力は絶対的に腐敗する」



# 大衆の非合理性

古代ギリシア時代から常に危惧されてきたのは、「大衆は理性的・合理的に考えて政治判断をすることができないのではないか」ということであった

→19c以後心理学が登場し、この懸念に理論的根拠を与えることとなる



# 大衆の非合理性

ウォルター・リップマン「見てから判断するのではなく、決定してから見る」

→人間は自らの状況を客観的に把握することなどできず、ステレオタイプを通じて歪められた虚像を見て物事を判断している。自分と対立する情報は排除し、同意する情報を積極的に取り込むことでその実像はますます歪められていく

→こうした人間が政策決定をするのはあまりにも危険であり、「アウトサイダー」たる大衆は「インサイダー」としての職業政治家の判断を尊重した方がよい



# 大衆の非合理性

最近の脳科学の研究により、「自由意志」が否定されようとしている

→意志は能動的に考えて発生するものではなく、周囲の環境と身体で決まる

※ただし、自由な「感覚」はある



# 大衆の非合理性

## 【実験①】

右利きの人にモノを指差してほしいと頼む

→ほとんどの人が右手で指差す

「左右どちらかの手で指差してください」と頼む

→右手をつかう確率が60%に下がる

右脳を磁器刺激したまま同じ質問をする

→60%から20%にまで下がる

←注目すべきは、被験者は頑なに「自らの意志で選んだ」と信じていること



# 大衆の非合理性

## 【実験②】

「アルファベットが流れてくる画面を見ながら、  
押したくなったらボタンを押してその時の文字  
を覚えておく」という実験での脳波を調べたところ、  
ボタンを押す7～10秒前に脳が事前活動  
を開始していることが判明した

→私たちが感じている「自由意志」は脳が事後  
的に生成した副産物であって意志それ自体で  
はない



# なぜこれが問題なのか？

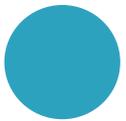
人間の判断の基となっていると考えられてきた自由意志の存在が揺らぐことで、デモクラシーやリベラリズムの前提となっている「外部の影響を受けない自由な意志」という存在そのものに疑いがかけられることになる！



# 民主主義の意義

佐々木毅「人間の基本的人権に適合する仕組みは、民主政治しかないのです」

丸山眞男「デモクラシーとは、素人が専門家を批判することの必要と異議を認めることの上に成り立っているものです——政策を立案したり実施したりするのは政治家や官僚でも、その当否を最終的に決めるのは、政策の影響を蒙る一般国民でなければならぬというのが健全なデモクラシーの精神です。」



# 民主主義の展望

熟議民主主義…議論と対話によって意見や選好が変わるという前提の下、一般市民が議論を繰り返してより広く深い視野を獲得し、合意形成を目指すという考え方

→市民社会を重視し、多元性と一元制の対立の克服を目指した



# 最後に

民主主義社会に生きる我々は自由とそれに伴う責任を享受し、自らの思考の偏向に常に注意を傾けつつ積極的な意思表示を行っていかなければならない



# 参考文献

- 宇野重規(2013)「西洋政治思想史」有斐閣アルマ
- 杉田敦・川崎修(2006)「現代政治理論」有斐閣アルマ
- 福田歓一(1985)「政治学史」東京大学出版会
- 福田歓一(1977)「近代民主主義とその展望」岩波新書
- 福田歓一(1970)「近代の政治思想—その現実的・理論的諸前提」岩波新書
- 丸山眞男(2006)「現代政治の思想と行動」未来社
- 丸山眞男(1976)「戦中と戦後の間」みすず書房
- 丸山眞男(2014)「政治の世界」岩波文庫
- 小室直樹(2006)「日本人のための憲法原論」集英社
- 佐々木毅(2007)「民主主義という不思議な仕組み」ちくまプリマー新書
- 

池谷裕二(2012)「脳には妙なクセがある」扶桑社  
池谷裕二(2009)「単純な脳、複雑な「私」」朝日出版社  
トクヴィル(2005)「アメリカのデモクラシー」岩波文庫  
W. リップマン(1987)「世論」岩波文庫  
オルテガ・イ・ガセット(1995)「大衆の反逆」ちくま学芸文庫  
ギュスターヴ・ル・ボン(1993)「群集心理」講談社学術文庫



ご清聴ありがとうございました＼(^o^)/

